

# 高校生が持つ自己の将来像と進路探索行動が 進路選択に与える影響

鈴木 翔<sup>1)</sup>・金澤 貴之<sup>2)</sup>

1) 秋田大学大学院工学資源学研究科・東京大学大学院

2) 群馬大学教育学部障害児教育講座

(2015 年 9 月 30 日受理)

## The Influence on the High School Student's Course Selection by Their Self Images of Future and Career Explorations

Sho SUZUKI<sup>1)</sup>, Takayuki KANAZAWA<sup>2)</sup>

1) Graduate School of Engineering and Resource Science, Akita University/

Graduate School, the University of Tokyo

2) Department of Special Education, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted September 30th, 2015)

### 1. 問題の所在と課題の設定

本稿の目的は、高校生が抱く将来像のイメージと進路探索行動が彼らの進路選択に与える影響を検証することである。なぜ、高校生の進路選択に影響を与える要因を将来像のイメージと進路探索行動に求めるのか。それは、これまでの進路選択を対象としてきた研究において、高校生自身がどのような将来像を持ち、進路を探索し、そして選択に至っているのかという、彼ら自身の主体的な文脈が、実はそれほど十分には検討されてこなかったのではないかという問題関心によるものである。

もちろん、これまでの研究で着目されてきたような家庭背景や大学収容力、地域間格差など、彼らを取り巻く社会的背景は、高校生の進路選択を考える上で重要な変数であり、それらがいかに進路選択へ与えてきたのかということに関しては、主に格差の是正を促す教育政策に対し、有用な示唆を与えてきたことは間違いない(矢野・濱中 2006, 潮木 2008, 藤村 2009, 上山 2011, 朴沢 2012 など)。

しかし、我が国の平成 26 年度の我が国の大学進学率は、過年度卒業生を含め 56.5% となっており(文部科学省 2015)、半数以上の高校生が大学へ進学している現状を鑑みれば、かつて Trow (2010) が指摘したように、大学へ進学するという事は、過去に比べて、制約的なものから開放的なものへと変化している可能性がある。もしこのように考えられるならば、現代の日本では、ユニバーサル段階以前に比べれば、社会的な要因によって、大学やその他の高等教育機関への進学を制限されていた一定層の高校生が、個人の意思によって、高等教育機関へ進学しやすくなったことを示していることが考えられる。

また、文部科学省(2010)の『高等学校学習指導要領解説総則編』においては、学校設定科目・学校設定教科への取組に関して、「発表・討論、自己の学習計画の立案等を通して、自己の能力・適性、興味・関心等と各種職業に求められる資質・能力を踏まえ、自己の将来の生き方や進路について考察すること。」(p.37)が規定されており、「自己の生き方や進路」についての理解を深めることが高校在学中の課題と

して挙げられている。さらに近年では、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るため」、そして、最終的には「主体的に進路を選択する能力・態度を育成する」ために、小学校在から発達段階に応じて、キャリア教育が積極的に推進されているという現状がある（三村 2004, p.12）。

このような教育現場の流れを汲めば、高校在学時までに形成された将来像のイメージがどのように形成されており、彼らの進路選択へどのような影響を与えているのかということを検証する意義は十分あると言えるだろう。さらに言えば、高校では自己の将来像のイメージを具体的な進路選択へと結ぶため、情報収集や進路指導の教員への相談、あるいは地域との連携などが行われているが、これらの進路探索行動が、彼らの進路選択へいかなる影響を与えているのかということについても、これまで十分に検討されてきたとは言いがたい。

以上のような問題関心から、本稿では次の2つの課題の検証を通して、本稿の問いに接近することとする。

**課題 1** : 高校生の将来像のイメージは、進路選択にどのような影響を与えているか。

**課題 2** : 高校生の進路探索行動は、進路選択にどのような影響を与えているか。

## 2. 分析に用いるデータと変数の設定

### 2.1. 使用するデータ

本稿の分析に用いるデータは、東京大学教育学部

比較教育社会学コースが、東京都の都立高校9校に在学する高校2年生を対象に、2007年10月下旬から12月上旬にかけて行われた「都立高校生の生活・行動・意識に関する調査」である。調査対象校は、学研編(2007)『都立に入る！2008年入試用』を参考にして、都立高校を「大学進学率」(3分類)、旧学区(3分類)のバランスを考慮しながら選定された。調査項目は、主に学校生活や進路意識に関するものであり、教室内での集団自記式で調査票を回収している。調査票は教室内における集団自記式によって回収され、最終的に1,548人から回答を得ている。なお、調査の概要の詳細は、ベネッセ教育研究開発センター・東京大学教育学部比較教育社会学コース編(2009)に記載されている。

本データの特徴は、高校卒業後の進路希望や自己の将来像のイメージ、進路探索行動の積極性に関する項目はもちろんのこと、本稿の課題を検証する上で不可欠な統制変数が豊富に含まれていることである。このデータの特徴から、本データは本稿の課題を検証する上で適切なデータであると考えられることができるだろう。

### 2.2. 変数の設定

続いて本稿の分析に用いる変数の説明を行う。まず、2つの分析課題の「将来像のイメージ」にあたる変数を設定するために、「将来の望ましい生き方」という質問項目を用いて分析を行った。ここで設定した変数を本稿の分析では、「将来像のイメージ」の指標として分析を行っていく。まず、本調査の分析対象者が、将来の望ましい生き方をどのように考えて

表1 将来の望ましい生き方の単純集計表 (有効パーセント)

	とても そう思う	まあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない	有効度数
責任は重くても、やりがいのある仕事をしたい (%)	17.2	38.5	33.7	10.6	(1480)
社会の中で自分が果たすべき役割を見つけたい (%)	24.8	41.9	26.2	7.1	(1478)
自分の夢を実現するためにがんばりたい (%)	44.1	39.0	12.4	4.5	(1483)
他人に負けないうがんだり続けたい (%)	20.4	40.7	32.0	6.9	(1483)
暮らしていける収入があればのんびり暮らしたい (%)	41.0	45.5	10.7	2.8	(1484)
多少退屈でも平穏な生涯を送りたい (%)	19.3	39.5	31.1	10.1	(1478)
社会的な地位や名誉のある人間になりたい (%)	13.3	32.7	42.0	12.1	(1485)
お金持ちになりたい (%)	41.9	36.0	17.5	4.6	(1482)

表2 将来の望ましい生き方の構造（最尤法による因子分析）

	第1因子	第2因子	第3因子
	自己実現志向	安定生活志向	地位達成志向
責任は重くても、やりがいのある仕事をしたい	0.790	-0.068	-0.119
社会の中で自分が果たすべき役割を見つけない	0.663	0.066	0.037
自分の夢を実現するためにがんばりたい	0.651	0.045	-0.049
他人に負けないようがんばり続けたい	0.543	-0.042	0.220
暮らしていける収入があればのんびり暮らしたい	0.032	0.976	-0.004
多少退屈でも平穏な生涯を送りたい	-0.030	0.422	0.070
社会的な地位や名誉のある人間になりたい	0.053	-0.045	0.766
お金持ちになりたい	-0.085	0.116	0.558
固有値	2.785	1.436	1.057

プロマックス回転後の因子負荷量を記載

表3 将来の望ましい生き方の組み合わせの割合と順位

総合		性別				高校ランク						自己実現志向	安定生活志向	地位達成志向
		男子		女子		上位		中位		下位				
順位	割合	順位	割合	順位	割合	順位	割合	順位	割合	順位	割合			
1	22.8	1	22.7	1	22.8	3	16.1	1	25.9	1	28.1	×	×	×
2	19.5	2	19.2	2	19.8	1	22.2	2	18.1	2	17.4	○	×	○
3	15.9	3	18.8	4	13.0	2	17.8	4	11.6	3	16.2	○	○	○
4	13.3	4	12.9	3	13.6	5	11.0	3	15.4	4	14.5	×	○	×
5	9.4	6	7.4	5	11.4	4	11.3	5	9.6	5	7.2	○	×	×
6	7.2	5	7.8	7	6.4	7	7.3	6	8.2	6	6.6	×	×	○
7	6.5	8	4.6	6	8.4	6	7.8	7	6.1	7	5.3	○	○	×
8	5.5	7	6.5	8	4.6	8	6.6	8	5.1	8	4.7	×	○	○

いるのかを単純集計表で示したのが、表1である。

表1を見ると、多くの生徒が将来の「望ましい生き方」と考えている項目は、「暮らしていける収入があればのんびり暮らしたい」であり、次いで「自分の夢を実現するためにがんばりたい」「お金持ちになりたい」であることがわかる。逆に「望ましい生き方」と考えていないのは、順に「社会的な地位や名誉のある人間になりたい」「責任は重くても、やりがいのある仕事をしたい」「多少退屈でも平穏な生涯を送りたい」であることが読み取れる。

さらに、これらの変数を用いて、分析対象者の「将来像のイメージ」の構造を把握するため、表1の質問項目に対して、プロマックス回転による因子分析（最尤法）を行った。その結果を表したのが表2である。分析の結果、5回の反転で解が収束し、固有値

1以上の軸が3つ抽出された。累積寄与率は66.0%である。因子負荷量は表2に示したとおりである。表2の結果より、第1因子は「自己実現志向」、第2因子は「安定生活志向」、第3因子は「地位達成志向」を表していると解釈できる。

さらに「将来像のイメージ」の3つの因子得点の値を平均値0、標準偏差1に標準化し、0以上の値を示したものを「○」、0未満の値を示したものを「×」として、組み合わせとその割合を表したものが表3である。これを見ると、最も分布の割合が多いのは、「自己実現志向」「安定生活志向」「地位達成志向」のすべてを持たない生徒であり、全体の22.8%を占めていることが確認できる。そして、次に多いのは、「自己実現志向」と「地位達成志向」を持つが、「安定生活志向」を持たない生徒（19.5%）であり、

表4 進路探索行動の単純集計表(有効パーセント)

	とても積極的	まあ積極的	あまり積極的でない	まったく積極的でない	有効度数
進路に関する資料やパンフレットを見る(%)	15.2	41.5	30.1	13.3	(1,500)
担任や進路指導の先生に相談する(%)	7.3	24.3	44.1	24.2	(1,497)
進路に役立てるために資格試験・検定試験を受験する(%)	5.3	16.9	45.1	32.6	(1,498)
進路に役立てるためにアルバイトをする(%)	7.5	14.7	25.8	48.7	(1,498)

表5 使用する変数の設定

四年制大学進学希望ダミー	高校卒業後に四年制大学への進学を希望=1, 希望しない=0
短大・専門学校進学希望ダミー	高校卒業後に短期大学、または専門学校への進学を希望=1, 希望しない=0
就職希望ダミー	高校卒業後に就職、家業の手伝い、またはパート・アルバイトをすることを希望、希望しない
高校ランク上位ダミー	高校の入学難易度が高い=1, それ以外
高校ランク下位ダミー	高校の入学難易度が低い=1, それ以外
女子ダミー	女子=1, 男子=0
文化資本	新聞を読む頻度と本(雑誌やマンガを除く)を読む頻度を尋ねる質問項目をカテゴリカル主成分分析で統合
通塾ダミー	現在、塾に通っている=1, 通っていない=0
校内成績	同じ学校にいる高校2年生の中で成績が下のほう=1, 中の下=2, 中くらい=3, 中の上=4, 上のほう=5
一日あたりの自主学習時間	学校や塾・予備校での授業、家庭教師との学習以外での平日の学習時間を5倍し、休日の学習時間を2倍し合算したのち、7で除算。
アルバイト経験ダミー	今までにアルバイトをした経験がある=1, ない=0
自己実現志向ダミー	表1の因子分析で得た第1因子を標準化。正の値=1, 負の値=0
安定生活志向ダミー	表1の因子分析で得た第2因子を標準化。正の値=1, 負の値=0
地位達成志向ダミー	表1の因子分析で得た第3因子を標準化。正の値=1, 負の値=0
資料やパンフを見るダミー	高校卒業後の進路に関する資料やパンフレットを積極的に見ている=1, 見ていない=0
先生に進路相談ダミー	高校卒業後のことを積極的に担任や進路指導の先生に相談する=1, しない=0
資格・検定試験ダミー	高校卒業後の進路に役立てるために資格試験・検定試験を積極的に受験している=1, していない=0
進路のためのバイトダミー	高校卒業後の進路に役立てるために積極的にアルバイトをしている=1, 0

次いで「自己実現志向」「安定生活志向」「地位達成志向」のすべてを持っている生徒(15.9%)となっている。なお、男女差や在学する高校ランクごとに割合を比較しても、おおよその割合は変わらず、どのような層においても、これら3つの組み合わせで「将来像のイメージ」を持っている生徒が全体の過半数以上を占めていることが確認できるだろう。本稿では、ここで設定した3つの因子得点の値を平均値0、標準偏差1に標準化し、0以上の値を示したものを

1、0未満の値を示したものを0として、それぞれ「自己実現志向ダミー」「安定生活志向ダミー」「地位達成志向ダミー」として設定し、以後分析を行っていく。

また、もう一つの進路探索行動については、表4に示した4つの進路探索行動に関する質問項目に対し、肯定的な回答(「とても積極的」または「まあ積極的」)をしたものを1、否定的な回答(「あまり積極的でない」または「まったく積極的でない」)をした

表6 使用する変数の記述統計量

	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	該当%
四年制大学進学希望ダミー	1,455	0.000	1.000			64.8
短大・専門学校進学希望ダミー	1,455	0.000	1.000			16.2
就職希望ダミー	1,455	0.000	1.000			9.1
高校ランク上位ダミー	1,548	0.000	1.000			39.1
高校ランク下位ダミー	1,548	0.000	1.000			41.0
女子ダミー	1,541	0.000	1.000			49.2
文化資本	1,494	-1.119	2.525	0.000	1.000	
通塾ダミー	1,441	0.000	1.000			23.5
校内成績	1,541	1.000	5.000	2.676	1.156	
一日あたりの自主学習時間	1,528	0.000	5.000	0.621	0.950	
アルバイト経験ダミー	1,504	0.000	1.000			55.3
自己実現志向ダミー	1,464	0.000	1.000			51.2
安定生活志向ダミー	1,464	0.000	1.000			41.2
地位達成志向ダミー	1,464	0.000	1.000			48.1
資料やパンフを見るダミー	1,500	0.000	1.000			56.7
先生に進路相談ダミー	1,497	0.000	1.000			31.7
資格・検定試験ダミー	1,498	0.000	1.000			22.2
進路のためのバイトダミー	1,498	0.000	1.000			23.0

ものを0として、ダミー変数化して分析を行っていく。

なお本稿では、他の要因を統制するため、一貫して、高校ランク、性別、文化資本、通塾、校内成績、学習時間、アルバイト経験を統制して分析を行っていく。使用する変数の設定については表5を、使用する変数の記述統計量は表6を参照されたい<sup>(4)</sup>。

### 3. 分 析

#### 3.1. 課題1「高校生の将来像のイメージは、進路選択にどのような影響を与えているか」の検証

まず課題1「高校生の将来像のイメージは、進路選択にどのような影響を与えているか」の検証を行う。高校卒業後の進路希望を従属変数に設定し、将来像のイメージを独立変数に設定して分析を行ったものが表7である。従属変数の基準は、「まだ決めていない」である。

表7を見ると、四年制大学という進路選択には、

地位達成ダミーが効果を与えており、短大・専門学校という進路選択へは、自己実現ダミーが効果を与えていることがわかる。そして、就職という進路選択には、将来像のイメージは効果を与えていないことがわかる。このことから、地位達成という将来像のイメージは、進学という進路選択と結びつきやすく、就職という進路選択には、自己実現という将来像のイメージが結びつきやすいということが確認された。

#### 3.2. 課題2「高校生の進路探索行動は、進路選択にどのような影響を与えているか」の検証

続いて、課題2「高校生の進路探索行動は、進路選択にどのような影響を与えているか」の検証を行う。先の課題1で検証した将来像のイメージを統制し、進路探索行動が進路選択へ与える影響を分析したのが、表8である。

表8を見ると、資料やパンフを見るダミー、先生に進路相談ダミー、資格・検定試験ダミーが四年制

表7 高校卒業後の進路希望の規定要因  
(多項ロジスティック回帰分析、基準：まだ決めていない)

	四年制大学		短大・専門学校		就 職	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
高校ランク上位ダミー (基準：高校ランク中位)	2.937	18.861 ***	0.232	1.261	0.204	1.226
高校ランク下位ダミー	-0.328	0.721	0.403	1.497	1.525	4.594 ***
女子ダミー	-0.308	0.735	0.816	2.261 ***	0.208	1.231
文化資本	0.139	1.149	0.106	1.112	0.256	1.292
通塾ダミー	0.855	2.351 *	-0.360	0.698	-1.229	0.293
校内成績	0.462	1.588 ***	0.119	1.127	0.029	1.029
一日あたりの自主学習時間	0.389	1.475	0.267	1.306	-0.025	0.976
アルバイト経験ダミー	-0.264	0.768	0.500	1.649	0.040	1.041
自己実現志向ダミー	0.466	1.593	0.664	1.943 *	0.387	1.473
安定生活志向ダミー	-0.259	0.772	-0.319	0.727	-0.038	0.963
地位達成志向ダミー	0.578	1.782 *	-0.015	0.985	0.070	1.073
(定数)	-0.368		-1.047	*	-1.497	**
N	1,548					
-2 対数尤度	1751.360					
Nagelkerke 決定係数	0.512					
尤度比のカイ 2 乗検定	カイ二乗値 739.620 有意確率 0.000					

\*\*\* :  $p < 0.001$ , \*\* :  $p < 0.01$ , \* :  $p < 0.05$

表8 高校卒業後の進路希望の規定要因 (進路探索行動の効果の検証)  
(多項ロジスティック回帰分析、基準：まだ決めていない)

	四年制大学		短大・専門学校		就 職	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
高校ランク上位ダミー (基準：高校ランク中位)	3.127	22.814 ***	0.315	1.370	0.362	1.436
高校ランク下位ダミー	-0.175	0.839	0.545	1.725 *	1.638	5.145 ***
女子ダミー	-0.509	0.601 *	0.557	1.745 *	0.108	1.114
文化資本	0.018	1.018	-0.014	0.986	0.212	1.236
通塾ダミー	0.729	2.074 *	-0.494	0.610	-1.240	0.289
校内成績	0.410	1.507 ***	0.028	1.028	0.015	1.015
一日あたりの自主学習時間	0.183	1.200	0.075	1.078	-0.118	0.889
アルバイト経験ダミー	-0.322	0.725	0.446	1.563	-0.238	0.789
自己実現志向ダミー	0.077	1.080	0.301	1.351	0.195	1.216
安定生活志向ダミー	-0.346	0.708	-0.440	0.644	-0.089	0.915
地位達成志向ダミー	0.560	1.750 *	0.006	1.006	0.028	1.029
資料やパンフを見るダミー	0.735	2.086 **	1.543	4.680 ***	-0.330	0.719
先生に進路相談ダミー	0.890	2.436 *	0.225	1.252	0.836	2.306 *
資格・検定試験ダミー	0.940	2.560 *	0.739	2.093	0.744	2.104
進路のためのバイトダミー	-0.147	0.863	-0.022	0.978	0.459	1.582
(定数)	-0.548		-1.380	**	-1.440	**
N	1,294					
-2 対数尤度	1788.260					
Nagelkerke 決定係数	0.555					
尤度比のカイ 2 乗検定	カイ二乗値 860.653 有意確率 0.000					

\*\*\* :  $p < 0.001$ , \*\* :  $p < 0.01$ , \* :  $p < 0.05$

表9 高校卒業後の進路希望の規定要因（交互作用の検証）  
（多項ロジスティック回帰分析、基準：まだ決めていない）

	四年制大学		短大・専門学校		就 職	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
高校ランク上位ダミー （基準：高校ランク中位）	3.114	22.509 ***	0.282	1.326	0.245	1.278
高校ランク下位ダミー	-0.151	0.860	0.616	1.852 *	1.727	5.623 ***
女子ダミー	-0.515	0.598 *	0.597	1.817 *	0.139	1.149
文化資本	0.014	1.014	-0.016	0.984	0.204	1.226
通塾ダミー	0.757	2.132 *	-0.487	0.614	-1.236	0.291
校内成績	0.419	1.521 ***	0.037	1.038	0.005	1.005
一日あたりの自主学習時間	0.189	1.208	0.101	1.106	-0.062	0.940
アルバイト経験ダミー	-0.323	0.724	0.416	1.516	-0.285	0.752
自己実現志向ダミー	0.288	1.334	0.165	1.179	0.618	1.855
安定生活志向ダミー	-0.042	0.959	-0.358	0.699	-0.042	0.958
地位達成志向ダミー	0.645	1.906	0.649	1.914	-0.032	0.968
資料やパンフを見るダミー	1.398	4.048 **	2.288	9.859 ***	0.777	2.174
先生に進路相談ダミー	0.731	2.077	-0.110	0.895	0.319	1.376
資格・検定試験ダミー	1.871	6.497 *	1.242	3.463	1.490	4.438
進路のためのバイトダミー	-0.227	0.797	0.107	1.113	0.311	1.364
自己実現×資料・パンフ	-0.141	0.869	-0.032	0.969	-1.690	0.185 *
自己実現×教師に進路相談	-0.055	0.946	-0.245	0.783	0.529	1.697
自己実現×資格・検定試験	-1.077	0.341	-0.453	0.636	-2.707	0.067 *
自己実現×進路バイト	-0.379	0.684	0.115	1.121	0.785	2.192
安定生活×資料・パンフ	-0.798	0.450	-1.012	0.363	-1.489	0.226 *
安定生活×教師に進路相談	0.284	1.329	1.147	3.149	0.914	2.494
安定生活×資格・検定試験	-0.480	0.619	-0.533	0.587	-0.024	0.976
安定生活×進路バイト	-0.017	0.983	0.353	1.423	0.745	2.106
地位達成×資料・パンフ	-0.479	0.619	-0.676	0.508	0.588	1.801
地位達成×教師に進路相談	0.153	1.165	0.095	1.099	0.157	1.170
地位達成×資格・検定試験	0.015	1.016	0.074	1.077	1.314	3.721
地位達成×進路バイト	0.377	1.458	-0.882	0.414	-1.084	0.338
(定数)	-0.801		-1.647	**	-1.652	**
N	1,294					
-2 対数尤度	1744.323					
Nagelkerke 決定係数	0.575					
尤度比のカイ 2 乗検定	カイ二乗値 904.590 有意確率 0.000					

\*\*\* : p<0.001, \*\* : p<0.01, \* : p<0.05

大学への進路選択に有意な影響を与えていることが確認できる。また、短大・専門学校への進路選択には、資料やパンフを見るダミーが、就職には、先生に進路相談ダミーが有意な影響を与えている。なお、進路のためのアルバイトは、どの進路選択にも有意な影響を与えてはいない。

なお、課題1の検証で短大・専門学校への進路選

択に有意な効果が見られた、自己実現ダミーが進路探索行動を独立変数に投入した場合には、有意な効果を与えていないことがわかる。このことから、自己実現を将来像のイメージとして持っている生徒が、資料やパンフレットを見ることによって、事後的に短大・専門学校への進路を選択していることを示していることがわかる。つまり、自己実現という

将来像は、資料やパンフレットの閲覧という進路探索行動を媒介して、短大・専門学校という進路へ影響を与えているというように解釈できる。

また、先生に進路相談をすることは、四年制大学と就職という2つの進路選択へ有意な影響を与えていることが確認できる。ここから、進路相談を受けた先生は、生徒に対して、短大・専門学校への進学よりも、四年制大学や就職への進路選択を勧める傾向があることが読み取れるだろう。

次に、将来像のイメージと進路探索行動が併せ持つ効果について検証する。表7~8で独立変数に投入した変数に加えて、将来像のイメージと進路探索行動の交互作用項を分析モデルに加えたものが表9である。

表9を見ると、自己実現×資料・パンフ、自己実現×資格・検定試験、安定生活×資料・パンフの3つの交互作用項が就職という進路選択へ負の影響を与えている。これは、自己実現志向を持つ生徒が資料・パンフを見ること、そして資格・検定試験を受けることにより、就職という進路選択をしづらくしていることを表していると考えられる。つまり、自己実現志向を持つ生徒にとっては、資料やパンフレットを見て進路に関する情報を集めることで、就職以外の進路に興味を持ちやすくなったり、資格や検定試験を受験したことにより、高等教育機関で知識を深めたいと思うようになったりしやすくなるという解釈が可能になるだろう。そして、安定生活志向の生徒が、資料やパンフレットを見ることにより、就職という進路選択と選びづらくなるという点は、進学に関する資料やパンフレットを見て情報を得たことで、安定的な生活を得る上では、今就職するよりも進学したほうが良いと感じる傾向があることが想定できる。

なお、先の検証で将来像のイメージと進路探索行動は、就職という進路選択には結ばないことが示されていたが、表9の分析によって、進路探索行動は生徒がどのような将来像のイメージを持っているかによって、就職という進路選択へ効果を与えていることが明らかになった。

## 4. 考 察

以上のように、本稿では、「高校生の将来像のイメージは、進路選択にどのような影響を与えているか」と「高校生の進路探索行動は、進路選択にどのような影響を与えているか」という2つの課題の分析を通して、高校生が抱く将来像のイメージと進路探索行動が彼らの進路選択に与える影響について検証を行ってきた。

その結果、明らかになったのは、以下の3点である。第1に、地位達成という将来像を持つ生徒は、四年制大学へ進学しやすい。第2に、自己実現という将来像を持つ生徒は、進学先の資料やパンフレットを閲覧するという進路探索行動を媒介して、短期大学・専門学校への進学という進路を選択しやすい。そして第3に、特定の自己の将来像は特定の進路探索行動により、就職という進路を選択しづらくする。これらの知見を合わせると、高校生の進路選択を考える際には、高校生が抱く将来像のイメージと進路探索行動の影響や、それらの組み合わせを考慮する必要があることが明らかになったと言えるだろう。

ただし、本稿には以下のような課題がある。まず、今回の分析に用いた従属変数は、実際の進路選択ではなく、高校2年次の進路希望の規定要因を検証していることである。高校2年生次と卒業時では、進路の選択が異なっている可能性がある。この点においては、同一のサンプルを対象とした継続的な調査により、精緻な検証を行うことができるだろう。そして、もう一つの課題は、本稿が主眼とした、高校生の主体的な進路選択が実は社会的な要因に左右されている可能性があることである。この点に関しては、地域差や社会的要因を測定する質問項目が含まれ、かつ綿密なサンプリングが行われた調査のデータを分析することにより、明らかにされる必要があるだろう。今後は、これらの残された課題に応えることで、さらなる検証を進めていきたい。



〈注〉

(1) 文化資本の指標の作成にあたっては、「平日に本(マンガや雑誌を除く)を読む」「ふだん家で新聞を読む」の2つの質問項目をカテゴリカル主成分分析により統合して作成した。成分負荷量については、表10に示したとおりである。

表10 文化資本指標の作成(カテゴリカル主成分分析)

		数量化	成分負荷量
平日に本(マンガや雑誌を除く)を読む	まったくしない	-0.865	0.780
	30分くらい	0.720	
	1時間くらい	1.349	
	2時間くらい	1.349	
ふだん家で新聞を読む	3時間以上	1.998	0.780
	とてもあてはまる	1.930	
	まああてはまる	1.535	
	あまりあてはまらない	0.030	
	まったくあてはまらない	-0.883	
寄与率		60.9%	

〈引用文献〉

ベネッセ教育研究開発センター・東京大学教育学部比較教育社会学コース編, 2009, 『都立高校生の生活・行動・意識に関する調査報告書』

朴澤泰男, 2012, 「大学進学率の地域格差の再検討——男子の大学教育投資の都道府県別便益に着目して」『教育社会学研

究』第91集, pp.51-71.

藤村正史, 2009, 「大学進学における所得格差と高等教育政策の可能性」『教育社会学研究』第85集, pp.27-47.

学研編, 2007, 『都立に入る! 2008年入試用』学習研究社.

上山浩次郎, 2011, 「大学進学率の都道府県間格差の要因構造とその変容——他母集団パス解析による4時点比較」『教育社会学研究』第88集, pp.207-227.

三村隆男, 2004, 『キャリア教育入門——その理論と実践のために』実業之日本社.

文部科学省, 2009, 『高等学校学習指導要領解説総則編(平成21年)』東山書房.

———, 2014, 『平成26年度学校基本調査報告書(初等中等教育機関専修学校・各種学校)』

Trow A, Martin, 2010, Twenties-Century Higher Education : Elite to Mass to Universal, Johns Hopkins Univ Pr. (= 1976, 天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学——エリートからマスへ』東京大学出版会.

潮木守一, 2008, 「大学進学率上昇をもたらしたのは何なのか——計量分析と経験値の間で」『教育社会学研究』第83集, pp.5-22.

矢野真和, 濱中淳子, 2006, 「なぜ、大学に進学しないのか」『教育社会学研究』第79集, pp.85-103.